

石仏あれこれ

はじめに

森隆一



如来坐像 パキスタン・ガンダーラ

(東京国立博物館より)

はじめに

石仏の写真を取り始めたのは 1975 年であった。越前・一乗谷の西山光照寺跡で撮ったのが最初と思っていたが、アルバムからは、大津・坂本の慈眼堂で撮ったのが最初のようなのである。これ以前にも、お寺にあるものとして撮ってはいたが、石仏の写真撮ることではじめてである。この後、学会・シンポジウムの帰りや、夏休みの旅行などで石仏の写真を撮ってきた。石仏は白黒で撮影し、自分で現像・引き伸ばしを行った。これらの写真のフィルム・スキャンは 2000 年頃から考えていたが、今だに実行できていない。ここで、引き伸ばした写真をスキャンしても相当の解像度が得られることがわかった。

これらの写真と、石仏に関して書き溜めたものに追加・改訂をし、タイトルを“石仏あれこれ”として投稿することにした。写真アルバムから、石仏の写真を主に選び、思い出すことと感想などを付け加えたものを“シリーズ A 石仏を訪ねる”、石仏に関してのメモを改訂したものを“シリーズ B 石仏を考える”とする予定である。

ここで、年寄りの昔話の感はあるが、石仏写真撮影の経緯を振り返ってみることにする。

まずは、1975 年頃、土門拳の写真展「室生寺」が開かれた。この展覧会

に行った記憶はないが、写真展のパンフレットを所持している。このパンフレットには、石仏(軍荼利明王)が載せられている。この写真は、石仏に興味を持つ背景となっていたと思う。

仏像を撮ることを考えると、堂内の仏像は殆どが撮影禁止であり、撮影可能であっても、堂内は暗く照明が必要である。また、参拝している人もあり、撮影を諦めることにした。この他に、名のある寺院は参拝者も多く、構図通りに撮影することが難しいこともある。富山・日石寺や栃木・大谷観音などは、摩崖仏が本尊として堂内に祀られていて、本尊の撮影は諦めた。

ここで、石仏の写真ならば、自由に撮れるかもしれないと考えた。石仏の殆どは屋外にあり、建物の外の境内は殆どの寺で撮影禁止ではない。屋外のため、特別な効果を考えなければ、照明の必要は殆どない。また、路傍にあるものも多く、本尊、あるいは御利益のあるとされている一部の石仏を除けば、参拝している人も殆どなく、落ち着いて撮影できるものが多い。半面、不便な場所にあることが多く、思惑が外れた場合時間を持て余すことも少なくなかった。

殆どの墓地には、入口に、六地藏が祭られている。さらに、全ての寺に燈籠・手水鉢等の何らかの石造物が必ずある。さ迷い歩くことが好きな人間にとっては、道を間違えたり、予定を変更しても、代わりに他の者を見つけることができる可能性があることになる。あるいは、予定を立てずに

この辺を歩き回るとして、でかけることもできる。実際に、予定と異なる所に行ってしまったが、満足して帰ってきたこともある。

暫くして感じたことは、如来系の仏像は、鑑賞するのはいいが、いい写真が撮れたことは殆どない。写真のテクニックが無いことも大きな要因であろうが、位負けしていることを感じた。時間をかけて対面し、感じることを得る必要があると感じた。これに対し、羅漢はもともと表情があり、見ただけで何か感じる場所をつかみ易い。当面はある程度表情の感じられる観音以下の石仏対象とすることにした。羅漢と札所石仏群は外れを引くことは稀である。ただし、羅漢が置かれている寺は少なく、決まった旅行先(出張先)にあるとは限らない。一方、札所石仏群は各地で見られ、今は殆ど意味のない行政区画の郡に一カ所ていどは見つけられると思っている。

石仏写真について、幾つかの節目があった。

1回目の節目となったのは、秩父・金昌寺を訪ねたことである。ここの慈母観音を時間をかけて撮影し、ほぼ意図に近い写真を撮ることができた。これ以降は、石仏を主な対象とすることにした。

これまでの旅行は、年2回の学会と1-2回開催されるシンポジウムの前後に近隣を訪れることで行っていた。簡単に訪問できる場所は殆ど

訪れたこともあり、石仏を対象とすることにより、新たな目標が加わることになる。

秩父の小旅行中に、本格的に石仏撮影を行うには、荷物と時間の両面から、車が必要であることを痛感した。午後を費やして、三峰神社を訪れたときである。街中心部で交通の便の良い所にあるものもあるが、多くの石仏は郊外で交通の便の悪いところにあるものが多い。逆に、そのようなところであることから残っているともいえる。公共交通機関のみによれば、1日1・2ヶ所が標準である。期待したものであれば、満足して帰ることが出来る。期待はずれの場合、車があれば、他に変更が可能となる。車の場合、1日2ヶ所～数ヶ所が可能となる。反面、周りの雰囲気を楽しむことが疎かになり、移動が容易になったことにより、時間をかけて写真を撮ることが疎かになり易くなった。

土門のような、緊張感の高い張りつめた写真を撮ることは無理な気がしてきた。替わりに、岩宮武二と入江泰吉の石仏写真に親近感を感じてきた。入江は風景写真の一環として撮影したいように感じた。岩宮の立場は土門に近いが、写真は温和な感じを受ける。

2回目の節目は、中国旅行である(?1982)。この旅行で、有名な石窟寺院である大足・龍門・雲岡を訪れた。また、杭州の靈隱寺・飛来峰も訪れた。後者は石窟寺院でなく、境内の岩に石仏等が彫られているものである。

小休息をいれながら、石仏を眺め、スナップ写真の感覚で写真を撮って回るだけで3時間ほどはかかってしまう。対象が素晴らしいため、カメラを向けて撮るだけでそこそこの写真となった。それぞれに1週間ほど滞在して、写真を撮ってみたいというようなことも考えた。

今までのやり方で写真を撮っていたのでは、日本では写真を撮る気がなくなってしまうてきた。じっくり、石仏と向かい合って写真を撮ることが必要と感じた。

1990年頃に石仏写真を撮ることを中断した。中断(殆ど停止)の要因は、上記中国旅行のほかに、子供を生まれたことと、情報教員免許課程の設置とこれに伴い担当することになった‘情報と社会’の講義の準備である。このとき、個人情報保護法でGoogle検索したら数件しかヒットしなかった記憶があるが、現在では約1,650,000,000件となっている。次に、大学をめぐる幾つかの波風がたってきた。これらのキー・ワードは、講座制の廃止・教養部の改革・研究費の選択的集中的配布・教員評価・自己点検・国立大学の法人化などである。

この波風がさざ波程度になった頃には、定年が目前になってきた。

3回目の節目は2010年(65歳)頃である。公私共に先が見えてきて、老後の過ごし方を考えるようになった。途絶えていた、石仏巡りを再開する

のを第一候補とした。その準備作業として、過去の探訪履歴と集めた文献のリスト、および、これらから石仏所在リストを作成することを始めた。選択基準は地図上で位置が確認でき、訪れ易いことである。道祖神や庚申塔などは文献では“何々町の路傍”と記載されている。また、単体の場合も多く、所在の確認が困難である。また、設置場所が移動することも多い。

中断の間に、恐らく 2010 年辺りから、石仏関連の本が減ってきた。これに応じるように、石仏を扱う Web Site が増えてきた。普通の観光写真から、かなり本格的なレポートまでヴァリエティに富んでいる。Google 検索で「石仏 写真」ではヒット数が多すぎて検索にならない。ここでは、石仏周辺の風景やなど写真集では見られないものも多く掲載されている。写真を見るならば、この方が便利でもある。難点はネットに接続したコンピュータが無ければ見られないことと、サイトが閉鎖されることである。ウェブサイト提供会社が業務を止めることもあった。閉鎖されたサイトに対する図書館的なものができればと思っている。

また、石仏に関して、本と Web より調べたことと考えたことを纏めることにも手を付けた。ここで、特に興味をもって調べたのは、石窟(半石窟)寺院である。

インドの石窟寺院はリュキアの石窟墓を起源とするとの説を見つけた

(神谷武夫とインドの建築>リュキア建築紀行「[石窟寺院の謎](#)」)。ペルシャを介して伝わったとすれば、可能性は高いと思われる。仏教の中央アジアへの伝播において、ゾロアスター教の影響を受けたのではないか。大乘仏教(華嚴経か法華経)のその跡があるか。

臼杵石仏と九州の磨崖仏に関して調べているうちに得た、臼杵の説話から、これは製錬者の集団の物語ではないか。鉄または銅が考えられる。初めは、山口辺りの関係から銅で、製錬者が山口に移ったことを伝えていると考えた。

石窟寺院の造営に関して、鉄製の工具の普及が必要ではなかったか。材石によるが、花崗岩には不可欠である。

物部守屋との戦いが加わったものを見ると、これは豊の国の歴史ではないかという感じを持った。都を朝鮮と置き換えたらどうなるかなどを考えたことが“正史を彷徨う”のきっかけである。

ここで、興味は古代史の方に移り、石仏に関する考察は中断することとなった。

2011年3月11日に東日本大震災が発生した。被害が大きかった福島県東部(浜通り)には多数の摩崖(石窟)仏が残されている地域でもある。ここは1日でさっと通り抜け簡単に寄れる所を2カ所ほどを訪れたが、いい写真が撮れた記憶はない。管理者のいない石窟などは柵をしては入れないよ

うになっているものが少なくない。

震災の発生を聞いてこれらの摩崖仏は無事なのかと思った。しかし、これらの摩崖仏の古いものは平安時代に造られたとされている。1000年以上の間何度か地震にあったはずなので、今回も持ちこたえるかもしれない。考えてみれば、東日本大震災の惨事は、津波と原子炉のメルトダウンに依るものである。さらに考えてみれば、地震によるトンネルや地下構造物の崩壊は意外と少ない。これは、全体が同じ動きをするからということを感じた気がする。これをきっかけにコンパクト・デジカメで、出かけたついでに石仏の写真の撮り始めた。

最後に、写真の処理について纏めておく。

カラー写真のうち、2000年ごろまでに撮影したものは、ポジ・フィルムの為、スキャンできていない。それ以後はデジタル・カメラでの撮影のため処理可能で、次のように処理した。

エプソン CP800 で撮影したものは、オリジナルの解像度が長辺 410・短辺 320 で、これはそのまま用いた。その他ものは解像度が高いため、長辺 450・短辺 350 に収まるように解像度を下げたものを用いた。Word で取り込んで pdf file に変換する過程で、写真の解像度が下がるようである。ならば、解像度を下げたものを取り込んだ方が docx のサイズも小さくなり良いのではないかと考えた。

石仏の写真は白黒で撮影してきた。初めは、べた焼きから選んで四つ切に伸ばしていた。1976年頃からキャビネに伸ばし、幾つかを全紙に伸ばした。この後キャビネを手札に変更した。

白黒写真は、まず、引き伸ばした写真のスキャンは解像度 600、8bit グレーで行った。手札はそのまま用い、他は長辺 3000・短辺 2000 に収まるように解像度を下げたものを用いた。

べた焼きは、解像度 1000 でスキャンしたものを拡大すれば、大きな文字を読むことと、写っているものの推定が出来ることがわかった。必要に応じて、これらを補助的に使用する予定である。

最後に、画像処理はフリー・ソフトの Fire Alpaka を用いた。

なお、スキャンに関する用語は、エプソンのプリンタ・ドライバと Fire Alpaka の用語を用いた。

文献

Web Site

Wikipedia Category: 「[仏教美術](#)」、[「仏教遺跡](#)」、[「仏像](#)」、

Wikipedia [「磨崖仏](#)」、[「石窟](#)」

[「仏教伝来のみちすじを辿った旅](#)」 > みちくさ、

[「広済寺](#)」 > 仏教、[「無盡燈](#)」 > 仏教のコーナー、

[「浄土宗大信寺](#)」 > 住職閑話 > ガンダーラの仏像、仏像の起源 など

[「南アジアへの招待](#)」 > Photo Gallery、Research and Studies

[「Wikipedia Commons](#)」、Category: [「Asian deities](#)」、[「Japanese deities](#)」

[「仏教へのいざない](#)」 — 青少年のための仏教入門 index —

> [「仏教へのいざない](#)」、[「再考仏教伝来](#)」

佼成出版社 > [「新アジア仏教史](#)」

石仏写真が豊富な Web Site を 2 つ挙げておく。

[「石仏に会いに行く](#)」

アジアの宗教美術と博物館 [「石仏と石塔](#)」

書籍

[1] 宇野 茂樹 「仏教東漸の旅 -はるかなブツダの道-」、思文閣出版、
1999

- [2] 京都大学文学部考古学教室編「豊後磨崖石仏の研究」
京都帝国大学文学部 考古学研究報告第9冊、臨川書店、1976
- [3] 谷口 鉄雄・片山 撰三「白杵石佛」白杵石佛保存会、1963
- [4] テレビ埼玉編「秩父の石仏」文一総合出版、1980
- [5] 平幡 良雄 「秩父三十四カ所」札所研究会、1970
- [6] 邊見 泰子「磨崖仏紀行」平凡社、1987
- [7] 水尾 比呂志・細井 良雄・佐藤 宗太郎 「日本の石仏」鹿島研究所
出版会、1970
- [8] 水上 勉・一色 次郎・鈴木 秀雄「越前一条谷石佛」鹿島出版会、1975
- [9] 望月 信成・佐和 隆研・梅原 猛「仏像 心とかたち」NHK ブックス
20、日本放送出版協会、1965
- [10] 望月 信成・佐和 隆研・梅原 猛「続 仏像 心とかたち」NHK ブック
ス 30、日本放送出版協会、1965
- [11] 森山 隆平「羅漢の世界一巡礼と観賞一」柏書房、1984
- [12] 龍谷大学三五〇周年記念閣術企画出版編集委員会「佛教東漸 祇園精
舎から飛鳥まで」思文閣出版、1991
- [13] 若杉 慧「石佛讃歌」社会思想社、1968
- [14] 賀川 光夫 編「日本の石仏(1) 九州篇」国書刊行会、1984
- [15] 溝淵 和幸「日本の石仏(2) 四国篇」国書刊行会、1983
- [16] 畠中 弘・黒田 正 編著「日本の石仏(3) 山陰・山陽篇」

国書刊行会、1984

[17] 望月 友善 編「日本の石仏(4) 近畿篇」国書刊行会、1983

[18] 京田 良志 編「日本の石仏(5) 北陸篇」国書刊行会、1983

[19] 池田 三四郎・中沢 厚 編「日本の石仏(6) 甲信・東海篇」国書刊行会、1983

[20] 大護 八郎 編「日本の石仏(7) 南関東篇」国書刊行会、1983

[21] 大塚 省吾 編「日本の石仏(8) 北関東篇」国書刊行会、1983

[22] 板橋 英三 編「日本の石仏(9) 東北篇」国書刊行会、1984

[23] 大護 八郎「日本の石仏(10) 離島篇」国書刊行会、1983

[24] 道端 良秀「中国の石仏・石塔」法蔵館、1972

[25] 坂田 玄翔(隆一)「鄭道昭 秘境山東の磨崖」雄山閣、1984

[26] 楊 伯達・松原 三郎訳「埋もれた中国石仏の研究 河北省曲陽出土の白玉像と編年銘文」東京美術、1985

[27] 西尾 銈次郎「日本鋳業史要」(PDF file)

http://www.geocities.jp/e_kamasai/shiryu/nisio.html

[28] 佐藤 宗太郎・大護 八郎「石仏の美 II 岩の仏」木耳社、1969

[29] 高遠町史編纂委員会「石仏師 守屋 貞冶」小松総合印刷株式会社出版部、1977

[30] 金 両基・杉田 徹「韓国の石仏」淡交社、1975

[31] 黄 壽永・岩宮 武二・崔 元伍「新羅の石仏」朝日新聞社、1974